

『東方』二七五号より

小さな町に実った 友好交流の歩み

呉 紅華（大東文化大学非常勤講師）

大学の授業で中国文学の教鞭を取っていて、学生たちの中国文学への素養の稀薄さに、つくづくと困惑することがしばしばある。それには、最近の活字ばなれ現象の拡大もあるだろうが、それよりも知識欲旺盛な小学時代から彼らに関心を持つような中国文学の入門書のないことがあげられるのではないだろうか。

そのような矢先、泉彪之助・藤野明両氏の監修のもとに、福井県芦原町教育委員会が編纂した『魯迅と藤野厳九郎——日中友好の絆・百年前の出会い』（二〇〇三年三月刊）と題する、小学校五、六年生向けの社会科副読本として発行された小冊子を目にする機会があった。

藤野厳九郎は、魯迅の「藤野先生」に出てくる、仙台医学専門学校解剖学教授その人であり、彼は福井県芦原町出身である。また監修に当たられた泉彪之助氏は福井県立大学看護短期大学部名誉教授で、医師という立場から魯迅と藤野厳九郎の関係を明らかにした魯迅研究家でもある。さらに藤野明氏は、藤野厳九郎の親戚筋に当たり、大阪市立大学名誉教授である。

私はこの小冊子を読んで、小学校五、六年生の副読本として極めて簡潔に、しかも丁寧に書かれていることに驚かされた。本文はプロローグ、エピソードを除いて十章からなり、魯迅の生い立ち、あるいは人間的、精神的な自己形成過程と、藤野厳九郎のそれらとが、互いに対応するよう

泉彪之助・藤野明監修

『魯迅と藤野厳九郎』

——日中友好の絆・百年前の出会い』

B5判・五六頁・福井県芦原町教育委員会発行・二〇〇三年



な形で描かれていて、しかもそれらを重ね合わせるように編纂されていて分りやすい。とくにプロローグは地元の第十六回芦原町少年使節団の中国発見の旅の身近な思い出から興味深い話題を引き出し、エピソードには魯迅と藤野厳九郎との百年の出会いの「鍵」を提示し、芦原町と紹興市の友好交流の歴史をかえりみ、そして日本と中国の友好交流の発展に対する希望を語っている。それだけに監修者の心配りや、芦原町の熱い思いが伝わってくる。また添えられた魯迅や藤野厳九郎の年表も要点を得て、写真、資料も豊富に使われている。それに紹興と芦原町との友好二十年の歩みがさらにその奥行きを拡げている。私自身は藤野先生の生涯について、この書ではじめて学んだ点が多い。このような興味深い書物は心から多くの小学生に薦めたいところである。しかし、この小冊子は単に小学生向けのよい

▼『東方』275号より

一 小さな町に実った友好交流の歩み

▲ 呉 紅華

クリックすると次の段にジャンプします。

中国文学の入門書であるだけではなかった。それには日中友好都市交流のあり方という大きな課題が取上げられている。

仙台医専への入学が、文学者魯迅の思想転換への大きな契機となったことはあまりにも有名である。この小冊子でも触れられている、定期試験での好成績に対するほかの学生からの嫌疑や、有名な幻灯事件は、魯迅にとって衝撃的な出来事であった。しかし、藤野先生が魯迅の思想転換に特別な役割を果たしたわけではない。

魯迅が日本留学を果たしたのは、一九〇二年春のこと、当時東京は中国革命運動に携わる要人たちの往来も盛んで、在京の留学生たちの間でも革命支持の風潮が高まりつつあった。魯迅もまた、南京の鉱務鐵路学堂在学中から、敵復の翻訳になる、ハックスリーの『天演論』や、日本留学生の発行する雑誌を通して、西欧の近代思想や中国の改革、革命を唱える新思想に触れていったのであるが、ほぼこの頃から革命派の立場に立つようになったと言われている。そして一九〇四年末、東京で浙江省出身者の革命団体「光復会」東京支部が創設され、魯迅も参加している。彼が「光復会」に加入したのは、おそらく支部創設の直後であったと考えられ、それは彼が医学の道を放棄し、文学の道へと転換していった時期と重なりあうのである。

この小冊子にもその辺の事情については、「ある研究者によれば、『藤野先生』が現在のような内容になったのは後のことで、初めは中国人としての悩みが中心であったという。文章を推敲していくうちに藤野厳九郎の比重が大きくなっていき、藤野先生の思ひ出を主題とした作品になったとされている。」(二七頁)とあり、また魯迅の中国人の一人としての将来選択への葛藤が述べられている。これらを

▶ トップページにもどる

考え合わせてみると、魯迅が悩んだ末に結果として医学を捨てて文学へと向ったのは、人一倍感受性の強かった魯迅にとって、ある意味では必然的な帰結であったと考えられる。とは言っても、彼に大きな転機をもたらした結節点上にはやはり仙台医専の存在があり、そこで体験した藤野先生の誠実な学究態度は、魯迅生涯の転換を支える大きな力となり、藤野先生は彼に終生忘れえぬ存在となったのである。魯迅が一九三四年に翻訳者の増田渉に岩波文庫の一冊に入れる自分の作品として「藤野先生」だけは入れてほしいと指示したのがその影響の深さを物語っている。

仙台医専を離れる際にも魯迅は藤野先生を失望させまいと、文学への転向という真実を語らずに、ただ医学から生物学への転換と説明しただけであった。一九三六年、藤野先生は教え子魯迅の訃報を知る。そのとき彼はすでに郷里に戻り、開業医として過ごしていた時期である。先生の魯迅への惜別の想いは「謹んで周樹人様を憶ふ」の中で語られている。そして、この文章によつて藤野厳九郎が福井県にいたことが広く知られるようになったと言われている。

しかし、よく考えてみると、もしも魯迅がかくまで世界的にも著名な文学者として世に出なかつたとすれば、おそらく藤野先生と魯迅の心暖まる交流も世に現れることはなかつたであろう。しかし、たとえ魯迅が単に一介の中国人として生涯を終えたとしても、魯迅の心の中に刻み込まれた藤野先生という日本人への敬愛の情は、いささかも変わることはなかつたと言えるのである。つまり、藤野先生と魯迅との交流と、魯迅が著名人となったこととの間には何の関係もないのである。

なぜ魯迅の心に藤野先生という、一人の人間像がかくまで深く刻み込まれたのであろうか。それは藤野先生の無欲

な誠実さであったということに尽きるのではないだろうか。私たちは藤野先生と魯迅を語る時、このことを根底に据えて語らなければ、彼らの真心の交流は語れないし、理解もできないのである。そして、日中国国家間の交流も、友好都市間の交流も最初は人間同士の交流である。このような心と心の触れ合いこそ真の交流であることを肝に銘じなければならぬのである。

余談ながら、私もまた、魯迅の故郷である紹興の出身である。人も知るように紹興市は、大禹治水、臥薪嘗胆の故事や、書聖王羲之などの文化的歴史を背景に、王陽明、徐渭、賀知章、あるいは近代ともなれば、魯迅、蔡元培、秋瑾など著名文人を輩出した地である。特に魯迅との深い関係を持つ日本からの来訪者が急増したのは八十年代に入ってからのもので、その頃（一九八三年）杭州大学（現在の浙江大学）外国語学部日本語科を卒業した私は、縁あって紹興市人民政府外事弁公室に勤務することになった。その当初、数多くの日本からの友好使節団を迎え、一つまた一つと友好姉妹関係を結んだこと、またそれらの市や町の人々との暖かい交流は、今もなお鮮明な印象を残している。とりわけ、芦原町へは藤野巖九郎記念館落成記念や芦原温泉開湯百周年記念行事、また書道交流など紹興市友好訪問団の通訳として度々来日し、毎回暖かい歓迎を受け感動した思い出が多くある。

一方、ひとくちに国際間の友好交流と言っても様々であり、特に中国と日本の友好都市関係は行政管理上の規模の差異、人口、個人収入の差、文化の相違など乗り越えなければならぬ壁が数多く存在する。芦原町と紹興市の友好交流も最初から順風満帆ではなかった。しかし、双方は誠実な心で友好交流を一つまた一つと具体的な結晶として築

◀ 今月の『東方』

◀ 書評目次へ

▶ トップページにもどる

いてゆく。それがよい友好都市関係を結ぶ秘訣ではないだろうか。

近年来芦原町は少年使節団派遣以外にもまた数多くの友好交流行事を計画している。二〇〇〇年七月から半年にわたる「藤野巖九郎先生記念巡回展」、昨年の三月にこの小生向け社会科学副読本の出版、六月二十二日、二十九日の二回わたった福井放送人間ネットワーク岡田雄次氏プロデュースの「魯迅と藤野巖九郎」座談会、そして十一月二十四日には魯迅と藤野巖九郎の友好交流シンポジウムを開くなど、小さな芦原町だからこそできる意義深い友好交流行事が続けられている。

人口一万四千人あまりの芦原町と、いまは年間個人平均収入中国三番目の裕福都市、人口四百二十万人を抱える紹興市との友好交流は、一見アンバランスな関係のようだが、しかし、このことと、友好の本質とは、全く関係のないことなのである。それは有名人魯迅と無名であった藤野先生との交流が、それとは何の関係もなかったことと同じなのである。この小冊子には、この友好の本質を子供たちに教え、真の日中友好関係をわが町から、次世代を担う子供の中から築いてゆくのだという芦原町の切実な願いが込められている。私も中国文学研究者の一人として、また実際に両市町の友好都市関係の仕事に携わった一人の中国人として、このような小学生向けの副読本が刊行されたことに感動し、そして日中友好の発展に大きな希望を見出している。